様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０９３５

研究課題名（和文）インド音楽世界の定量的研究

研究課題名（英文）Quantitative study on Indian Music World

研究代表者
田森　雅一（TAMORI, Masakazu）

東京大学・総合文化研究科・学術研究員

研究者番号：１０５９２４５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、20世紀におけるインドの伝統音楽とその社会的世界の変化を定量的なアプローチによって把握することを目的とするものである。定量的二次分析の対象として、インド政府の音楽芸能の教育研究機関であるサンギート・ナータク・アカデミーから出版された『インド音楽家名鑑 WWIM』の初版(1968)と第２版(1984)を選定。『名鑑WWIM』所収の約3000人の諸属性について、データベース化を行い、重点項目のクロス集計による比較検討を行なった。また、各研究メンバーがインド各地の諸機関において関連資料の発掘・収集と関係者へのインタビューを行なった。そして、最終年度には研究成果についての学会発表を行った。

研究成果の概要（英文）：This research has for its aim to grasp a change of Indian traditional music and social world of musicians through 20th centuries by quantitative approach. First(1968) and second(1984) edition of Who's Who of Indian Musicians (WWIM) published from SNA was selected as a target of a quantitative secondary analysis. We built a database about the several attributes of 3000 musicians in the WWIM and did a cross tabulation and an analysis of the important item. Each study member corrected material and interviewed the person concerned at the India site. And the study results were announced at the academic meeting.

研究分野：文化人類学

キーワード：インド　南アジア　音楽・芸術　文化変容　グローバリゼーション　定量的研究　データベース　国際情報交換

１．研究開始当初の背景

インドの音楽文化は、独立を前後して大きく変化してきている。その変化の兆候は、独立前の古典音楽のパトロンであった宮廷社会（藩王・領主制）の崩壊にあり、独立後の大学・専門学校における古典音楽教育の推進やラジオ放送における古典音楽プログラムの重点化といった文化政策のあり方と無関係ではない。学校とラジオ放送は「音楽教師」と「放送局付音楽家」という新たな雇用を創出し、宮廷に替わる新たなパトロンとなり、古典音楽を宮廷から大衆の場に連れ出した。また、1960 年代以降、欧米におけるラヴィ・シャンカルらの活躍によって海外コンサートが活発化し、インド音楽の聴衆をインド文化圏外へと広げて今日に至っている。そして音楽を取り巻く文化環境は 1990 年代からさらに急速に変化してきている。その変化は、インドの経済開放と人の流動化、コンピューターのパーソナル化とインターネットの 普及にあることは言うまでもない。

このような音楽家の経済基盤や文化環境の変化は、演奏者・パトロン・聴衆という３者間の社会関係にも如実に現れ、インド音楽の上演形態・演目・楽器・振り付け・衣装などにも大きな変化を与えて来たと考えられる。インド音楽に関するこれらの変化の把握のため、フィードワークに基づく定性的な研究が蓄積されてきたが、定量的なアプローチは希少であった。

研究代表者は、1980 年代より北インドにおいて現地調査を行い、文化人類学および民族音楽学の視点から、古典音楽の歴史、世襲音楽家の親族・婚姻関係、音楽家とパトロンの社会関係、師弟関係における学習状況などに関して考察を重ねてきた。これらの調査は、参与観察やインタビューに基づく定性的なもので、音楽に関与して生きる人々の生活世界とその変化を地域やミクロな視点から把握しようとするものであった。しかし、文化環境や社会的世界の変化は、定性的な調査に基づくアプローチだけでは十分に把握することができない。例えば、音楽家たちの諸属性、聴衆の嗜好やその変化・変遷について知ることのできる具体的資料や論考はほとんど見当たらないのである。

２．研究の目的

本研究は、戦後におけるインドの古典音楽とその社会的世界の変化を定量的なアプローチによって把握することを目的としている。伝統音楽の社会的世界についてはフィールドワークに基づくミクロな視点からの定性的アプローチによる研究が蓄積されてきた。本研究は、そのような経験世界の動向をマクロな視点からのデータ提供と定量的分析によって探求し、インド音楽そのものと音楽家・聴衆・パトロンによって構成される社会関係の両面が変容している点を実証的に示すことを目指している。より具体的には、インドの各地域の大学・研究教育機関・放送局などに蓄積された各種資料の発掘とそれらデータの検討を行い、2 次分析の基盤となる資料整備（データベース化）に貢献し、インド音楽とその社会的世界の変化について定量的な検討を可能にすることにある。

３．研究の方法

本研究では、研究代表者、連携研究者 2 名、国内研究協力者 2 名のメンバー5 名（北インドの専門家３名、南インドの専門家２名。以後、メンバーと表記）による研究会を組織し、全年度を通じて以下のような基礎作業と現地調査を行った。

①音楽家情報のデータベース化のための重点項目の選定とフォーマット・デザインの作成とデータ入力作業および分析・検討
②インド各地域の研究教育機関等における各種資料の発掘のための事前調査・現地関係者とのネットワークの構築(以上、国内作業)
③インド現地における資料の発掘および関係者へのインタビュー(現地作業)
④発掘した資料の吟味と新たなデータベース化に向けての検討(国内作業)

４．研究成果

(1)2013 年度

2013 年度は、メンバーによる研究会（3 回）を開催した。研究会では、インド政府の音楽芸能の研究教育機関であるサンギート・ナータク・アカデミー(SNA)から出版された『インド音楽家名鑑 *Who's Who of Indian Musicians*』（以後『名鑑』）の初版（1968 年）と第 2 版（1984 年）所収音楽家の諸属性についてのデータベース化（ファイルメーカーを使用）のためのフォーマット・デザインについて検討を行った。決定されたフォーマットと重点項目に従い、初版と 2 版に掲載された音楽家約 3000 名のデータ、すなわち名前・年齢・音楽ジャンル・流派・師匠名・学位・レコーディング/海外演奏経験・所属機関等の入力作業を完了した（図１、表１）。

図１．WWIM 入力画面デザイン

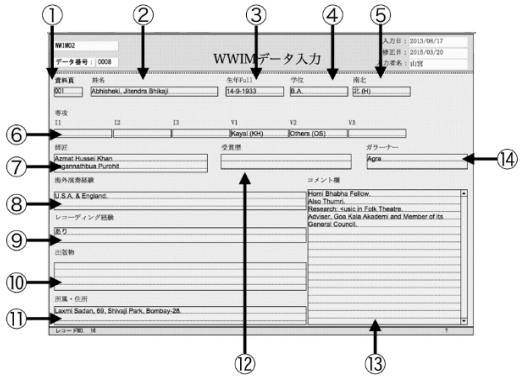

表１：WWIM データベース入力項目

① 当該データ頁番号	⑥ 専攻・ジャンル	⑪ 所属・住所
② 姓名	⑦ 師匠名（複数可）	⑫ 受賞歴
③ 生年	⑧ 海外演奏歴	⑬ 入力者コメント
④ 学位	⑨ レコーディング経験	⑭ 流派（ガラーナー）
⑤ 所属伝統（北／南）	⑩ 出版物	

その後、北インドと南インドの専門家が分担して、音楽家の名前から、宗教と性別を判定する作業を行った。入力時点での誤植の修正と表記の統一、また性別等の判定が困難なケースなど、より正確なデータベースの完成のための課題について検討した。

(2)2014 年度

2014 年度も前年度に引き続き、メンバー５名による研究会（3 回）を開催した。第 1 回の研究会では『名鑑』に掲載された音楽家情報についてのデータベースの精査・分析方法とともに、今後のデータ収集に関する検討を行った。また、第 2 回の研究会ではメンバーの現地調査計画について、そして、第 3 回目の研究会では海外調査の成果報告が行われた。この間、メンバー全員が当初の予定通り、現地（4 名がインド、1 名がシンガポール）での調査を行い、今後の定量分析の候補となる資料の発掘と関係者のインタビューを行なった。

　より具体的な活動項目と検討課題は以下の通り。

①データベース化された『名鑑』の校閲・校正および初版と第 2 版の重点項目のクロス集計による比較検討

②『名鑑』以後、すなわち 1990 年代以降のインド音楽世界を把握するための、インド各地の大学・研究教育機関・民間団体等における資料発掘・データ集収および関係者へのインタビューのための現地調査

③現地調査によって得られた資料に基づく、インド音楽世界の定量的把握に適した資料・データの検討と選定

上記②の調査に関して、田森雅一は北西インド（デリー・ジャイプル）、寺田吉孝は南インド（チェンナイ）、田中多佳子は北インド（コルカタ・ラクナウ・ムンバイなど）、小日向英俊は北インド（ベナレス・デリー）、竹村嘉晃はシンガポールにて、現地の諸機関において資料の発掘・集収と関係者へのインタビュー調査を行った。

また、上記③については、現地調査によって得られた資料のメンバー間での共有化を行い、今後データベース化を検討すべき資料候補の絞り込みを行った。その結果、*The Oxford Encyclopedia of the Music of India* (Oxford University Press, 2011)、*Fellows and Award-winners of Sangeet Natak Akademi* 1952-2010 (SNA,2011)、*Music Conference Souvenir* (The Music Academy Madras, 1929-)などに候補が絞られた。

(3)2015 年度

2015 年度は研究会を３回開催し、*Fellows and Award-winners of Sangeet Natak Akademi 1*952-2010 (SNA, 2011)を、『名鑑』に続く分析対象として選定。データベース（エクセル）への基礎入力作業を行った。また、『名鑑』データベースの分析と、検討結果の一部について学会発表（東洋音楽学会・第 66 回大会でのメンバー全員によるパネルディスカッション）を行った。

(4)まとめ

『名鑑』の２つの版の集計結果と比較からは、以下の点が明らかになった（一部事項のハイライトのみ掲載）。

①インド全体でみると、1960 年代から 1980 年代にかけて女性の音楽家の割合は 12%から 14%へと増加傾向にある。

②音楽家全体に占めるムスリム音楽家の割合は減少傾向にあり、全人口比に比べてもその割合は 7-8%と少ない。しかし、北と南に分けてみると、ムスリム音楽家は北インド古典音楽（ヒンドゥスターニー音楽）に集中しており、その割合は 15%と人口比を上回っている。これらは、北インドと南インドの文化的相違が、宗教や民族の歴史と関連しており、音楽ジャンルや音楽家の属性もその例外ではないことが示唆された。また、ムスリム音楽家の専攻は声楽よりも器楽の割合が高い。このことは、宗教的な言葉（歌詞）のない器楽の性質に関係していと推測される。

③学位取得者の 92%はヒンドゥーで、ムスリムは 2%台にすぎない。学位取得者の多くは大学や専門学校の教師を目指す。一方、ラジオ放送局付き音楽家に占めるムスリム音楽家の割合は 25-28%と高い。この結果は、「理論のヒンドゥー、実践のムスリム」という言説と符合するものとなっている。

④南インド古典音楽（カルナータカ音楽）における音楽家の居住地の分布としては、チェンナイ（旧マドラス）を州都とするタミルナードゥ州が 42%と最多であるが、圧倒的な数字ではなく、他州や地方都市における古典音楽受容や実態に関する研究が必要である。

⑤海外演奏歴の分析からは、北インドからの渡航先では欧米が最も多く、近隣諸国（ネパールやパキスタンなど）が続くのに対して、南インドでは近隣諸国（スリランカ）および東南アジア（シンガポールやマレーシアなど）が多い。1960 年前後から活発になる西洋でのインド音楽需要以前から、近隣諸国との音楽交流が行われていた一方で、西洋での演奏経験者は北インドにより多いことが明らかになった。

(5)展望と課題

本研究を通して、インド音楽世界のマクロな動向把握のためには、定量的なデータの活用が有意義であることが確認された。その一方で、データの分析・解釈に際しては、定性的

研究に基づく知見が不可欠であることも再認識された。今後は、定量的研究の可能性と限界についての議論と同時に、定性的研究との補完性についての探求も必要であると考える。
『名鑑』の分析に関する具体的課題としては、初版(1968)と２版(1984)のみで、その後の出版がなされていないため、経時的推移や変化を精緻に追うことはできなかった。また、北インドと南インドにおける文化歴史的差異はもちろんのこと、地域性を加味した分析的視点が必要である。宗教やカースト帰属、ジェンダーによる伝統的な専門領域の棲み分けとその変化、それら変化の地域的な差異、またインド音楽のグローバル化と関係する音楽家の海外演奏歴の時間的変化や聴衆に好まれる音楽（ラーガや音楽スタイル等）の変化等を把握するためには、経年的データの入手と地域性を加味した複数の研究者による分析が不可欠である。これらの点については、本研究においてインド現地で入手した資料候補（前頁に掲載）などがすでにあり、今後の研究継続が望まれる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
① 田森雅一、「インド音楽のグローバル化と21 世紀」『現代インド・フォーラム』査読有、No. 28、2016、17-24、http://www.japan-india.com/pdf/forum/64-1.pdf
② 小日向英俊、「インド音楽世界の定量的研究の試み」『パラゴーネ』、査読無、3 巻、2016、79-89
③ 竹村嘉晃、「『伝統』を支える多元的位相―シンガポールにおけるインド舞踊の発展と国家」『舞踊学』、査読無、38 号、2016、121-138
④ 田森雅一、「インド音楽の近代化とマスメディア―ラジオ放送が北インド古典音楽と音楽家の生活世界に与えたインパクト」『国立民族学博物館研究報告』、査読有、37巻3号、2013、359-391
⑤ 田森雅一、「インド音楽の社会的世界とその変容分析に向けて―『インド音楽家名鑑』の定量的把握」『埼玉大学教養学部紀要』、査読無、49 巻 1 号、2013、129-143

〔学会発表〕（計５件）
① 田森雅一、「伝統音楽研究における定量的アプローチの可能性と課題―インド音楽世界の動向を事例として（パネルディスカッション：パネル代表・田森雅一、パネリスト・寺田吉孝、田中多佳子、小日向英俊、竹村嘉晃）」、東洋音楽学会・第66 回研究大会、2015 年 11 月 1 日、東京都台東区・東京藝術大学
② 田森雅一、「“再帰的グローカル化”と音楽伝統の再生産―インド・ラージャスターンにおける世襲音楽家一族の１００年」、日本文化人類学会・第 48 回研究大会、2014 年 5 月 17 日、千葉県千葉市・幕張メッセ国際会議場
③ 寺田吉孝、「トロント市における南インド舞踊の実践」、東洋音楽学会・第 64 回大会、 2013 年 11 月 10 日、静岡県浜松市・静岡文化芸術大学
④ 田森 雅一、「多様性の還流と音楽伝統の変 容―フランスとインドを結ぶグローカル 化の諸相」、東洋音楽学会・第 64 回大会、 2013 年 11 月 10 日、静岡県浜松市・静岡文化芸術大学
⑤ 竹村嘉晃、「シンガポール社会におけるインド芸能の伝播と発展―マラヤーリー舞踊家のライフヒストリーを手がかりに」、東洋音楽学会・第 64 回大会、 2013 年 11 月 10 日、静岡県浜松市・静岡文化芸術大学

〔図書〕（計４件）
① 田森雅一、三元社、『近代インドにおける古典音楽の社会的世界とその変容―“音楽すること”の人類学的研究』、2015、全 544
② TERADA Yoshitaka, Lanham: Rowman & Littlefield, Fusion music in South India. In *This Thing Called Music: Essays in Honor of Bruno Nettl*, edited by Victoria Lindsey Levine and Philip V. Bohlman, 2015, 433-446
③ 竹村嘉晃、東京大学出版会、「踊る現代インド――グローバル化の中で躍動するインドの舞踊文化」『現代インド６　環流するインドの文化と宗教』、三尾稔・杉本良男編、2015、159-179
④ TERADA Yoshitaka, Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, The circular flow of South Indian music and dance. In *Music and Minorities from Around the World Research: Documentation and Interdisciplinary Study*, edited by Ursula Hemetek, Essica Marks and Adelaida Reyes, 2014, 47-71

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
田森　雅一（TAMORI, Masakazu）
東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員
研究者番号：10592454

(2)連携研究者
寺田　吉孝（TERADA, Yoshitaka）
国立民族学博物館・先端人類学研究部・部長
研究者番号：00290924

田中　多佳子（TANAKA, Takako）
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：70346112

(3)研究協力者
小日向　英俊（KOHINATA, Hidetoshi）
東京音楽大学・音楽学部・講師
研究者番号：00399742

竹村　嘉晃（TAKEMURA, Kazuaki）
人間文化研究機構・総合人間文化推進センター・研究員
研究者番号：80517045